

1-6-5 線形代数

ベクトルとは

- ベクトル

- いくつかの数を一列に配置したもの, つまり,

$$\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix} \quad \text{や} \quad \begin{bmatrix} 3.3 \\ 4.8 \\ 10.6 \\ 7.25 \end{bmatrix}$$

などを, ベクトルとよびます.

- 並べた数字 (つまり, 1, 0, -1 など) のことを, そのベクトルの成分とよびます.

- 並べ方の順番には意味があります. つまり, たとえば $\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{bmatrix}$ とは, 異なるベクトルです.

- スカラー

- ベクトルに対して, (1 つ 1 つの) 実数のことをスカラーとよびます.

n 次元ベクトル

- n 次元ベクトル

- $\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix}$ のように, n 個の成分からなるベクトル \mathbf{x} を n 次元ベクトルとよびます.

- ベクトルを表すには, このように太字のイタリック体 \mathbf{x} のほか, \vec{x} などが用いられます.

- \mathbf{x} が x_1, \dots, x_n を成分とするベクトルであることを, $\mathbf{x} = (x_i)$ と表記することもあります.

- 先頭から数えて i 番目の成分 x_i を, \mathbf{x} の第 i 成分とよびます.

列ベクトルと行ベクトル

- $x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix}$ のように，成分を縦に並べたベクトルを，列ベクトル（または，縦ベクトル）とよびます.
- 一方， $y = [y_1 \ y_2 \ \cdots \ y_n]$ のように，成分を横に並べたベクトルを，行ベクトル（または，横ベクトル）とよびます.

ベクトルの内積

- 2つの n 次元ベクトル x と y に対して,

$$\langle x, y \rangle = x_1 y_1 + x_2 y_2 + \cdots + x_n y_n$$

で定まるスカラーを, x と y の内積とよびます.

- 例 : $x = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \end{bmatrix}$, $y = \begin{bmatrix} 2 \\ 4 \end{bmatrix}$ のとき, $\langle x, y \rangle = 1 \cdot 2 + 3 \cdot 4 = 14$.

- 例 : $x = \begin{bmatrix} -3 \\ 0 \\ 5 \end{bmatrix}$, $y = \begin{bmatrix} 0.1 \\ -0.9 \\ 0.4 \end{bmatrix}$ のとき,
 $\langle x, y \rangle = (-3) \cdot 0.1 + 0 \cdot (-0.9) + 5 \cdot 0.4 = 1.7$.

- 記号 $\langle x, y \rangle$ の他に, $x \cdot y$ なども用いられます.
- $\langle x, y \rangle = \langle y, x \rangle$.
- 内積は, 次元が同じベクトルどうしでしか, 定義できません.

- 例 : $x = \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \end{bmatrix}$, $y = \begin{bmatrix} 2 \\ 4 \\ 7 \end{bmatrix}$ のとき, $\langle x, y \rangle$ は定義できません.

ベクトルの直交性

- 2つの n 次元ベクトル x, y の内積 $\langle x, y \rangle$ が 0 であるとき, x と y は直交するといいます.
- 例 : 2 次元ベクトル $\begin{bmatrix} 2 \\ 3 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} -6 \\ 4 \end{bmatrix}$ は直交します.
- 例 : 2 次元ベクトル $\begin{bmatrix} 2 \\ 3 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} 1 \\ 4 \end{bmatrix}$ は直交しません.
- 例 : 3 次元ベクトル $\begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ -2 \end{bmatrix}$ は互いに直交します.
- 例 : 2 次元ベクトル $\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$ と $\begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}$ は直交します.
- 例 : 3 次元ベクトル $\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$ は互いに直交します.

行列とは

- mn 個のスカラを

$$A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1n} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} & A_{m2} & \cdots & A_{mn} \end{bmatrix}$$

のように配置したものを, $m \times n$ 型行列とよびます.

- 各 A_{ij} を, 行列 A の (i, j) 成分とよびます.
- A が A_{ij} ($i = 1, \dots, m; j = 1, \dots, n$) を成分とする行列であることを, $A = (A_{ij})$ と表記します.
- 例 :
 - $\begin{bmatrix} 3 & 4 & 8 \\ 2 & 6 & 1 \end{bmatrix}$ は, 2×3 型行列.
 - $\begin{bmatrix} 2.1 & 6.9 & 4.5 \\ 5.6 & 1.2 & 8.7 \\ 7.3 & 3.4 & 9.8 \end{bmatrix}$ は, 3×3 型行列.

行列とベクトル (1/3)

- n 次元の行ベクトルは, $1 \times n$ 型の行列とみなせます.
 - 例: 4 次元の行ベクトル $[3 \quad 4 \quad -2 \quad 5]$ は, 1×4 型の行列とみなせます.
- m 次元の列ベクトルは, $m \times 1$ 型の行列とみなせます.
 - 例: 3 次元の列ベクトル $\begin{bmatrix} 1.6 \\ -2.5 \\ 4.7 \end{bmatrix}$ は, 3×1 型の行列とみなせます.

行列とベクトル (2/3)

- $m \times n$ 型の行列は, m 本の n 次元行ベクトルを縦に並べたものとみなせます :

$$\begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1n} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} & A_{m2} & \cdots & A_{mn} \end{bmatrix}.$$

- 例 : 3×4 型の行列

$$\begin{bmatrix} 2 & 6 & 11 & -5 \\ 8 & -3 & 9 & 15 \\ 12 & 1 & -7 & 4 \end{bmatrix}$$

は, 3 本の 4 次元行ベクトル

$$[2 \quad 6 \quad 11 \quad -5],$$

$$[8 \quad -3 \quad 9 \quad 15],$$

$$[12 \quad 1 \quad -7 \quad 4]$$

を (この順に) 縦に並べたものとみなせます.

行列とベクトル (3/3)

- $m \times n$ 型の行列は, n 本の m 次元列ベクトルを横に並べたものとみなせます :

$$\left[\begin{array}{c|c|c|c} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1n} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} & A_{m2} & \cdots & A_{mn} \end{array} \right] .$$

- 例 : 3×4 型の行列

$$\begin{bmatrix} 2 & 6 & 11 & -5 \\ 8 & -3 & 9 & 15 \\ 12 & 1 & -7 & 4 \end{bmatrix}$$

は, 4 本の 3 次元列ベクトル

$$\begin{bmatrix} 2 \\ 8 \\ 12 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 6 \\ -3 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 11 \\ 9 \\ -7 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} -5 \\ 15 \\ 4 \end{bmatrix}$$

を (この順に) 横に並べたものとみなせます.

正方行列, 対角行列

- $n \times n$ 型の行列のことを, n 次の正方行列とよびます.
- 正方行列 $A = (A_{ij})$ の成分 A_{ij} のうち, $i = j$ であるものを対角成分とよび, $i \neq j$ であるものを非対角成分とよびます.

- 例: $\begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} \\ A_{21} & A_{22} \end{bmatrix}$ は, 2 次の正方行列.

A_{11} と A_{22} は対角成分, A_{12} と A_{21} は非対角成分.

- すべての非対角成分が 0 である正方行列を, 対角行列とよびます.

- 例: $\begin{bmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 5 \end{bmatrix}$ は 2 次の対角行列, $\begin{bmatrix} 1.6 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 3.7 \end{bmatrix}$ は 3 次の対角行列.

単位行列

- すべての対角成分が 1 である対角行列を, 単位行列とよびます. 単位行列は I で表します:

$$I = \begin{bmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 1 \end{bmatrix}.$$

- 型を明確にするために, I_n と書くこともあります.

零行列, 実行列

- すべての成分が 0 である行列を, 零行列とよびます. 零行列は O で表します:

$$O = \begin{bmatrix} 0 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 0 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 0 \end{bmatrix}.$$

- 型を明確にするために, $O_{m,n}$ と書くこともあります.
- すべての成分が 0 であるベクトルを, 零ベクトルとよびます. 零ベクトルは $\mathbf{0}$ で表します (型を明確にするために, $\mathbf{0}_n$ と書くこともあります).
- すべての成分が実数である行列を, 実行列とよびます.
また, すべての成分が実数であるベクトルを, 実ベクトルとよびます.
- 以下では, 実行列と実ベクトルのみを扱います.

行列やベクトルの演算 スカラー倍

- 行列のスカラー倍は、そのスカラーを各成分に乘じます.

- 例 : $2 \times \begin{bmatrix} 3 & 4 & 8 \\ 2 & 6 & 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 6 & 8 & 16 \\ 4 & 12 & 2 \end{bmatrix}.$

- 一般に、実数 α に対して、 $\alpha A = \begin{bmatrix} \alpha A_{11} & \alpha A_{12} & \cdots & \alpha A_{1n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \alpha A_{m1} & \alpha A_{m2} & \cdots & \alpha A_{mn} \end{bmatrix}.$

- ベクトルのスカラー倍も同様です.
- (というのも、 n 次元の行ベクトルは $1 \times n$ 型の行列とみなせ、 m 次元の列ベクトルは $m \times 1$ 型の行列とみなせるのでした.)

行列やベクトルの演算 和と差

- 行列の和

- 2つの行列が同じ型をもつとき、それらの和が定義できます。

- 行列の和は、成分ごとの和です。

- 例：
$$\begin{bmatrix} 3 & 4 & 8 \\ 2 & 6 & 1 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 1 & 7 & 4 \\ 5 & 2 & 9 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 4 & 11 & 12 \\ 7 & 8 & 10 \end{bmatrix}.$$

- 一般に、
$$A + B = \begin{bmatrix} A_{11} + B_{11} & A_{12} + B_{12} & \cdots & A_{1n} + B_{1n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} + B_{m1} & A_{m2} + B_{m2} & \cdots & A_{mn} + B_{mn} \end{bmatrix}.$$

- $A + B = B + A.$

- 行列の差は、 $A - B = A + (-1)B.$

- 2つのベクトルの和と差も、同様に定義されます。

行列やベクトルの演算 行列と列ベクトルの積

- $m \times n$ 型の行列 $A = (A_{ij})$ と n 次元の列ベクトル x の積は、次のように定めます。

1. A を、行ベクトルを並べたものとみます：

$$A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1n} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} & A_{m2} & \cdots & A_{mn} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \mathbf{a}^{(1)} \\ \mathbf{a}^{(2)} \\ \vdots \\ \mathbf{a}^{(m)} \end{bmatrix}.$$

2. 積 Ax は、 m 次元の列ベクトルで、その第 i 列は $\mathbf{a}^{(i)}$ と x の内積です：

$$Ax = \begin{bmatrix} \langle \mathbf{a}^{(1)}, x \rangle \\ \langle \mathbf{a}^{(2)}, x \rangle \\ \vdots \\ \langle \mathbf{a}^{(m)}, x \rangle \end{bmatrix}.$$

例： $\begin{bmatrix} 1 & 4 \\ 3 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 5 \\ 6 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \left\langle \begin{bmatrix} 1 & 4 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 5 \\ 6 \end{bmatrix} \right\rangle \\ \left\langle \begin{bmatrix} 3 & 2 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 5 \\ 6 \end{bmatrix} \right\rangle \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 29 \\ 27 \end{bmatrix}.$

行列やベクトルの演算 行ベクトルと行列の積

- m 次元の行ベクトル y と $m \times n$ 型の行列 $A = (A_{ij})$ の積は、次のように定めます。

1. A を、列ベクトルを並べたものとみます：

$$A = \left[\begin{array}{c|c|c|c} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1n} \\ A_{21} & A_{22} & \cdots & A_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ A_{m1} & A_{m2} & \cdots & A_{mn} \end{array} \right] = \left[\begin{array}{c|c|c|c} \mathbf{a}_{(1)} & \mathbf{a}_{(2)} & \cdots & \mathbf{a}_{(n)} \end{array} \right].$$

2. 積 yA は、 n 次元の行ベクトルで、その第 j 列は y と $\mathbf{a}_{(j)}$ の内積です：

$$yA = \left[\langle y, \mathbf{a}_{(1)} \rangle \mid \langle y, \mathbf{a}_{(2)} \rangle \mid \cdots \mid \langle y, \mathbf{a}_{(n)} \rangle \right].$$

- 例： $[5 \quad 6] \begin{bmatrix} 1 & 4 \\ 3 & 2 \end{bmatrix} = \left[\left\langle [5 \quad 6], \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \end{bmatrix} \right\rangle \quad \left\langle [5 \quad 6], \begin{bmatrix} 4 \\ 2 \end{bmatrix} \right\rangle \right] = [23 \quad 32].$

行列やベクトルの演算 行列と行列の積

- $m \times n$ 型の行列 $A = (A_{ij})$ と $n \times k$ 型の行列 $B = (B_{jl})$ の積は、次のように定めます。

1. A は行ベクトルを並べ、 B は列ベクトルを並べたものとみます：

$$A = \left[\begin{array}{c} \mathbf{a}^{(1)} \\ \hline \mathbf{a}^{(2)} \\ \hline \vdots \\ \hline \mathbf{a}^{(m)} \end{array} \right], \quad B = \left[\begin{array}{c|c|c|c} \mathbf{b}_{(1)} & \mathbf{b}_{(2)} & \cdots & \mathbf{b}_{(k)} \end{array} \right].$$

2. 積 AB は、 $m \times k$ 型の行列で、その (i, l) 成分は $\mathbf{a}^{(i)}$ と $\mathbf{b}_{(l)}$ の内積です：

$$AB = \left[\begin{array}{cccc} \langle \mathbf{a}^{(1)}, \mathbf{b}_{(1)} \rangle & \langle \mathbf{a}^{(1)}, \mathbf{b}_{(2)} \rangle & \cdots & \langle \mathbf{a}^{(1)}, \mathbf{b}_{(k)} \rangle \\ \langle \mathbf{a}^{(2)}, \mathbf{b}_{(1)} \rangle & \langle \mathbf{a}^{(2)}, \mathbf{b}_{(2)} \rangle & \cdots & \langle \mathbf{a}^{(2)}, \mathbf{b}_{(k)} \rangle \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ \langle \mathbf{a}^{(m)}, \mathbf{b}_{(1)} \rangle & \langle \mathbf{a}^{(m)}, \mathbf{b}_{(2)} \rangle & \cdots & \langle \mathbf{a}^{(m)}, \mathbf{b}_{(k)} \rangle \end{array} \right].$$

行列やベクトルの演算 特別な場合 (1/2)

- n 次元の行ベクトル s と n 次元の列ベクトル x の積 sx は、スカラーで、 s と x の内積に等しいです : $sx = \langle s, x \rangle$.

- 例 : $\begin{bmatrix} 1 & 3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 \\ 4 \end{bmatrix} = 1 \cdot 2 + 3 \cdot 4 = 14.$

- n 次元の列ベクトル $x = (x_i)$ と m 次元の行ベクトル $y = (y_j)$ の積 xy は、 $n \times m$ 型の行列で、

$$xy = \begin{bmatrix} x_1 y_1 & x_1 y_2 & \cdots & x_1 y_m \\ x_2 y_1 & x_2 y_2 & \cdots & x_2 y_m \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ x_n y_1 & x_n y_2 & \cdots & x_n y_m \end{bmatrix}.$$

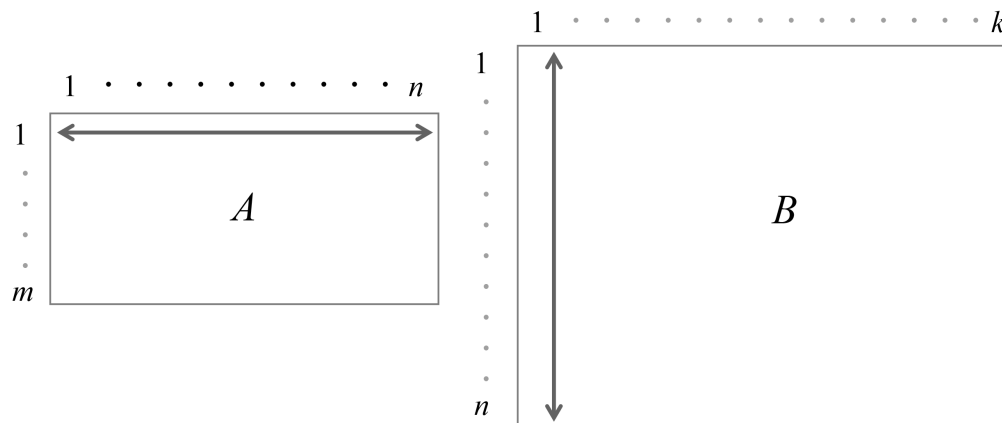
- 例 : $\begin{bmatrix} 1 \\ 3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 & 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 & 4 \\ 6 & 12 \end{bmatrix}, \quad \begin{bmatrix} 1 \\ 3 \\ 5 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 2 & 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 & 4 \\ 6 & 12 \\ 10 & 20 \end{bmatrix}.$

行列やベクトルの演算 特別な場合 (2/2)

- $m \times n$ 型の行列 A に対して, $AI_n = A$, $I_mA = A$.
 - つまり, 単位行列を掛けても行列は不変です.
- $m \times n$ 型の行列 A に対して, $AO_{n,k} = O_{m,k}$, $O_{k,m}A = O_{k,n}$.
 - つまり, 行列に零行列を掛けた結果は零行列です.

行列の積に関する注意点 (1/2)

- 積が定められるかは，型に依存します．



\longleftrightarrow と \updownarrow が同じ長さのときのみ，積 AB が定義されます．

- A が $m \times n$ 型行列で B が $n \times m$ 型行列なら， AB も BA も定義されます．しかし，両者は同じ型とは限りません（ AB は $m \times m$ 型で， BA は $n \times n$ 型）．

- $m = 2, n = 3$ の例：

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 3 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 4 \\ 5 & 0 \\ 0 & 6 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 16 \\ 15 & 0 \end{bmatrix},$$

$$\begin{bmatrix} 0 & 4 \\ 5 & 0 \\ 0 & 6 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 3 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 12 & 0 \\ 5 & 0 & 10 \\ 0 & 18 & 0 \end{bmatrix}.$$

行列の積に関する注意点 (2/2)

- A も B も n 次正方行列ならば, AB も BA も定義されます. しかし, $AB = BA$ が成り立つとは限りません.

- 例 :

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 2 & 1 \end{bmatrix}, \quad B = \begin{bmatrix} 1 & 3 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad AB = \begin{bmatrix} 1 & 3 \\ 2 & 7 \end{bmatrix}, \quad BA = \begin{bmatrix} 7 & 3 \\ 2 & 1 \end{bmatrix}.$$

- A が正方行列のとき, $A^2 = AA$, $A^3 = AAA (= A^2A = AA^2)$ と書きます.
- 「行列の割り算」は, してはいけません.
 - $AB = C$ でも, $B = \frac{C}{A}$ と書いてはいけません.

転置 (1/2)

- $m \times n$ 型の行列 $A = (A_{ij})$ に対して, (i, j) 成分が A_{ji} であるような $n \times m$ 型行列のことを, A の転置 (または, A の転置行列) とよび, A^T と書きます.
- 例: $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \end{bmatrix}$ に対して, $A^T = \begin{bmatrix} 1 & 4 \\ 2 & 5 \\ 3 & 6 \end{bmatrix}$.
- 転置を表す記号としては, A^T , tA , A' など用いられます.
- $(A^T)^T = A$.
- つまり, 転置の転置はもとの行列です.

転置 (2/2)

- $(AB)^{\top} = B^{\top} A^{\top}$.

- 例 :

$$\begin{bmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 3 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 4 \\ 5 & 0 \\ 0 & 6 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 16 \\ 15 & 0 \end{bmatrix},$$
$$\begin{bmatrix} 0 & 5 & 0 \\ 4 & 0 & 6 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 3 \\ 2 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 15 \\ 16 & 0 \end{bmatrix}.$$

- x と p がともに n 次元の列ベクトルであるとき, その内積は x^{\top} と p の積に等しいです : $x^{\top} p = \langle x, p \rangle$.

- 例 : $\begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}^{\top} \begin{bmatrix} 3 \\ 4 \end{bmatrix} = 1 \cdot 3 + 2 \cdot 4 = 11$.

- y と q がともに m 次元の行ベクトルであるとき, その内積は y と q^{\top} の積に等しいです : $y q^{\top} = \langle y, q \rangle$.

- 例 : $\begin{bmatrix} 1 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 3 & 4 \end{bmatrix}^{\top} = 1 \cdot 3 + 2 \cdot 4 = 11$.

ベクトルのノルム

- n 次元ベクトル $x = (x_i)$ に対して,
$$\|x\| = \sqrt{\langle x, x \rangle} = \sqrt{x_1^2 + x_2^2 + \cdots + x_n^2}$$
を x のノルムとよびます.
- $\|x\|_2$ とも書きます.
- ユークリッドノルムや, 2 ノルム, ℓ_2 ノルムともよばれます.
- 例 : $x = \begin{bmatrix} 3 \\ 4 \end{bmatrix}$ に対して, $\|x\| = \sqrt{3^2 + 4^2} = 5$.
- 例 : $x = [1 \ 2 \ 3]$ に対して, $\|x\| = \sqrt{1^2 + 2^2 + 3^2} = \sqrt{14}$.

ベクトルのノルムの性質

- $\|x\| \geq 0$.
- $\|x\| = 0$ ならば $x = \mathbf{0}$.
- 任意の $\alpha \in \mathbb{R}$ に対して, $\|\alpha x\| = |\alpha| \cdot \|x\|$.
 - 例 : $x = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}$, $\alpha = -3$, $\alpha x = \begin{bmatrix} -3 \\ -6 \end{bmatrix}$ に対して,
$$\|x\| = \sqrt{1^2 + 2^2} = \sqrt{5} \quad \|\alpha x\| = \sqrt{(-3)^2 + (-6)^2} = \sqrt{45} = 3\sqrt{5}.$$

逆行列とは

- n 次の正方行列 A に対して, 条件

$$AX = XA = I$$

を満たす n 次の正方行列 X を, A の逆行列とよびます.

- 一般に, A の逆行列は存在するとは限りません.
- A の逆行列が存在するとき, A は正則であるといいます.
- A が正則であるとき, A の逆行列を A^{-1} で表します.

逆行列の例 (1/2)

- 零行列 O の逆行列は存在しません（つまり、 O は正則ではありません）。
- 単位行列 I の逆行列は I そのものです。
- α を 0 でない実数とするとき、 αI の逆行列は $\frac{1}{\alpha}I$ です。
- d_1, d_2, \dots, d_n を 0 でない実数とするとき、 n 次の対角行列

$$D = \begin{bmatrix} d_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & d_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & d_n \end{bmatrix}$$

の逆行列は

$$D^{-1} = \begin{bmatrix} \frac{1}{d_1} & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \frac{1}{d_2} & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \frac{1}{d_n} \end{bmatrix}$$

です。なお、 d_1, d_2, \dots, d_n のうち 1 つでも 0 のものがあれば、 D は正則ではありません。

逆行列の例 (2/2)

- 2 次の正方行列

$$A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} \\ A_{21} & A_{22} \end{bmatrix}$$

は, $A_{11}A_{22} - A_{12}A_{21} \neq 0$ のとき正則であり, 逆行列は

$$A^{-1} = \frac{1}{A_{11}A_{22} - A_{12}A_{21}} \begin{bmatrix} A_{22} & -A_{12} \\ -A_{21} & A_{11} \end{bmatrix}$$

です.

- $A_{11}A_{22} - A_{12}A_{21}$ のことを A の行列式とよび, $\det A$ で表します.
- 解説はしませんが, 一般の n 次の正方行列 A に対しても, 行列式 $\det A$ は定義されています. そして, A が正則であることと $\det A \neq 0$ であることは, 同値です.

逆行列の性質

- n 次の正方行列 A が正則であるとき,
 - A の逆行列 A^{-1} はただ 1 つ存在します.
 - A^{-1} も正則です.
 - A^{-1} の逆行列は A です (つまり, $(A^{-1})^{-1} = A$ です).
 - $(A^{\top})^{-1} = (A^{-1})^{\top}$ が成り立ちます.
- n 次の正方行列 A, B が正則であるとき,
 - A と B の積 AB も正則です.
 - AB の逆行列は $B^{-1}A^{-1}$ です (つまり, $(AB)^{-1} = B^{-1}A^{-1}$ です).

逆行列の応用：線形方程式系

- 逆行列を用いると、線形方程式系（連立 1 次方程式）の解を計算することができます。

- 例として、2 つの未知数に関する線形方程式系

$$\begin{aligned} 2x + 5y &= 6, \\ x + 3y &= 4, \end{aligned} \quad \text{つまり,} \quad \begin{bmatrix} 2 & 5 \\ 1 & 3 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 6 \\ 4 \end{bmatrix}$$

は、両辺に行列 $\begin{bmatrix} 2 & 5 \\ 1 & 3 \end{bmatrix}^{-1} = \begin{bmatrix} 3 & -5 \\ -1 & 2 \end{bmatrix}$ を左から掛けることで

$$\begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 3 & -5 \\ -1 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 6 \\ 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -2 \\ 2 \end{bmatrix}$$

と解くことができます。

- 一般に、 n 次の正則な正方行列 A と n 次元の列ベクトル b とが与えられたとき、線形方程式系

$$Ax = b$$

の解は $x = A^{-1}b$ です。

- ただし、実際の数値計算では、この方法が用いられることはほとんどありません（より優れた方法が用いられます）。

固有値とは

- n 次の正方行列 A に対して、スカラー λ と零ベクトルではない n 次元の列ベクトル u が条件

$$Au = \lambda u \quad (*1)$$

を満たすとき、 λ を A の固有値とよび、 u を (λ に対応する) 固有ベクトルとよびます。

- 実行列であっても、その固有値は実数であるとは限りませんし、固有ベクトルは実ベクトルであるとは限りません。
- 式 (*1) は

$$(A - \lambda I)u = 0$$

と書き換えられますが、もし行列 $A - \lambda I$ が正則であれば（逆行列を両辺に左から掛けることで） $u = 0$ が導かれます。したがって、 λ が A の固有値であるための条件は

$$\det(A - \lambda I) = 0 \quad (*2)$$

であることがわかります。式 (*2) を、 A の特性方程式とよびます。

2 次の正方行列の固有値

- 具体例として, 行列 $A = \begin{bmatrix} 2 & 2 \\ 1 & 3 \end{bmatrix}$ の固有値を求めてみます.

$A - \lambda I = \begin{bmatrix} 2 - \lambda & 2 \\ 1 & 3 - \lambda \end{bmatrix}$ より, A の特性方程式は
 $(2 - \lambda)(3 - \lambda) - 2 = 0$, つまり, $(\lambda - 1)(\lambda - 4) = 0$
ですから, 1 と 4 が固有値です.

- この例からわかるように, 2 次の正方行列では, 固有値は 2 次方程式の解として得られます. したがって, 固有値は 2 個あります (ただし, その 2 個の値は等しい可能性があります).

- たとえば, 単位行列 $\begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}$ の 2 つの固有値はともに 1 です.

- 行列 $B = \begin{bmatrix} B_{11} & B_{12} \\ B_{21} & B_{22} \end{bmatrix}$ の固有値を λ_1, λ_2 とおくと, 2 次方程式の根と係数の関係から

$$\lambda_1 + \lambda_2 = B_{11} + B_{22}, \quad \lambda_1 \lambda_2 = \det B$$

が成り立ちます.

対称行列の固有値

- n 次の正方行列 A が $A^T = A$ を満たすとき, A を対称行列とよびます.
- 対称行列の固有値は, 実数です.
 - 固有ベクトルも, 実ベクトルに選ぶことができます (そこで, 以下では, 対称行列の固有ベクトルは実ベクトルとします).
- 対称行列の固有ベクトルは, 互いに直交するように選ぶことができます.
- 具体例として, 対称行列 $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -2 \end{bmatrix}$ の固有値は
$$\lambda_1 = -3, \quad \lambda_2 = 2$$
であり, 対応する固有ベクトルは
$$\boldsymbol{u}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{u}_2 = \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix}$$
です. ここで, $\langle \boldsymbol{u}_1, \boldsymbol{u}_2 \rangle = 0$ が成り立つことを確認できます (つまり, \boldsymbol{u}_1 と \boldsymbol{u}_2 は直交しています).

対称行列の対角化

- n 次の正方行列 Q が $Q^\top Q = I$ (つまり, $Q^{-1} = Q$) を満たすとき, Q を直交行列とよびます.
- 対称行列 A に対して, 直交行列 Q をうまく選ぶと行列 $Q^\top A Q$ を対角行列にすることができます. つまり,

$$Q^\top A Q = \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \lambda_n \end{bmatrix}$$

とすることができます.

- 対角成分 $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n$ は, A の固有値です.
- Q の列を

$$Q = \begin{bmatrix} \left| \right. & \left| \right. & \cdots & \left| \right. \\ \mathbf{q}_1 & \mathbf{q}_2 & \cdots & \mathbf{q}_n \\ \left| \right. & \left| \right. & \cdots & \left| \right. \end{bmatrix}$$

と表すと, \mathbf{q}_j ($j = 1, \dots, n$) は λ_j に対応する A の固有ベクトルであり, $\|\mathbf{q}_j\| = 1$, $\mathbf{q}_j^\top \mathbf{q}_l = 0$ ($j \neq l$) を満たします.

対称行列の対角化の具体例

- 具体例として、対称行列 $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -2 \end{bmatrix}$ の固有値は $\lambda_1 = -3$, $\lambda_2 = 2$ であり、対応する固有ベクトルは

$$u_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \end{bmatrix}, \quad u_2 = \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix}$$

です.

- u_1, u_2 をスカラー倍してノルムを 1 としたものを

$$q_1 = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 1 \\ -2 \end{bmatrix}, \quad q_2 = \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix}$$

で表すと、 A を対角化する直交行列として

$$Q = \left[\begin{array}{c|c} q_1 & q_2 \end{array} \right] = \begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{5}} & \frac{2}{\sqrt{5}} \\ -\frac{2}{\sqrt{5}} & \frac{1}{\sqrt{5}} \end{bmatrix}$$

が得られます. 実際, $Q^T A Q = \begin{bmatrix} -3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}$ となることを確認できます.

対称行列の対角化の応用：行列のべき乗

- 対角行列の k 乗 ($k = 1, 2, 3, \dots$) は、容易に計算できます。具体例として、

$$\begin{bmatrix} -3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix}^k = \begin{bmatrix} (-3)^k & 0 \\ 0 & 2^k \end{bmatrix}$$

が成り立ちます（つまり、対角成分それぞれを k 乗すればよいわけです）。

- $A = \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 2 & -2 \end{bmatrix}$ の k 乗を計算するには、対角化

$$Q^T A Q = \begin{bmatrix} -3 & 0 \\ 0 & 2 \end{bmatrix} \quad (*3)$$

を用いると便利です（ Q は、スライド 41にある直交行列のことです）。

- 式 (*3) の両辺を k 乗すると

$$(Q^T A Q)^k = \begin{bmatrix} (-3)^k & 0 \\ 0 & 2^k \end{bmatrix} \quad (*4)$$

です。 $Q^T = Q^{-1}$ を用いると、式 (*4) の左辺は

$$(Q^T A Q)(Q^T A Q) \cdots (Q^T A Q) = Q^T A^k Q$$

と変形できますので、 $A^k = Q \begin{bmatrix} (-3)^k & 0 \\ 0 & 2^k \end{bmatrix} Q^T$ が得られます。

対称行列の固有値とレイリー商

- n 次の対称行列 A を直交行列 Q で対角化します :

$$Q^{\top} A Q = \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \cdots & \lambda_n \end{bmatrix}, \quad Q = \begin{bmatrix} | & | & & | \\ \mathbf{q}_1 & \mathbf{q}_2 & \cdots & \mathbf{q}_n \\ | & | & & | \end{bmatrix}.$$

固有値は, 大きい順に $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \cdots \geq \lambda_n$ とします.

- 零ベクトルでない $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ に対して, $\frac{\mathbf{x}^{\top} A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^{\top} \mathbf{x}}$ をレイリー商とよびます.

- 固有値とレイリー商について,

$$\lambda_1 = \max_{\mathbf{x} \neq \mathbf{0}} \frac{\mathbf{x}^{\top} A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^{\top} \mathbf{x}}, \quad \lambda_n = \min_{\mathbf{x} \neq \mathbf{0}} \frac{\mathbf{x}^{\top} A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^{\top} \mathbf{x}}$$

が成り立ちます.

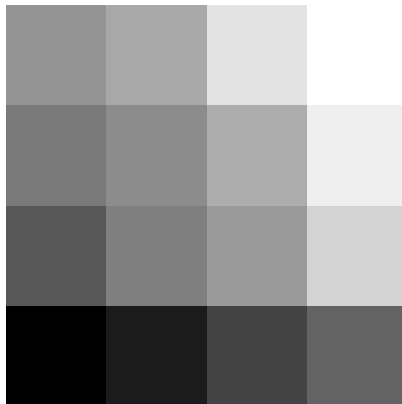
- $\mathbf{x} = c_1 \mathbf{q}_1 + c_2 \mathbf{q}_2 + \cdots + c_n \mathbf{q}_n$ とおき $Q^{\top} Q = I$ を用いると

$$\frac{\mathbf{x}^{\top} A \mathbf{x}}{\mathbf{x}^{\top} \mathbf{x}} = \frac{\lambda_1 c_1^2 + \lambda_2 c_2^2 + \cdots + \lambda_n c_n^2}{c_1^2 + c_2^2 + \cdots + c_n^2}$$

が得られることから示すことができます.

行列はどのように生じるのでしょうか (1/4)

- デジタル画像 (⇨ 2-2 データ表現)
 - グレースケール画像では, 各ピクセル (画素) に 0 から 255 の整数が割り当てられています.
 - こうして, 非負の整数行列 (つまり, すべての成分が 0 以上の整数である行列) が生じます.



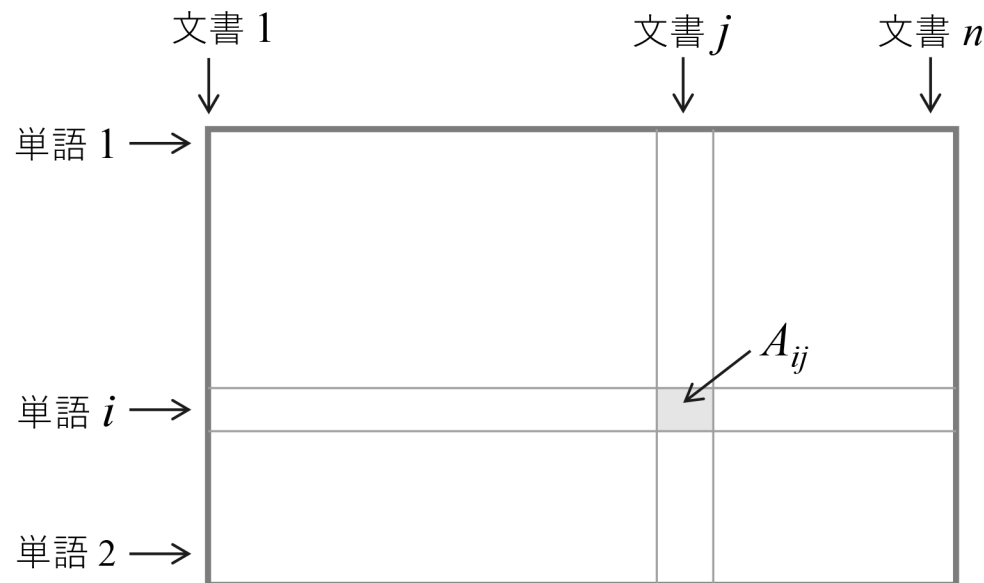
4 × 4 = 16 ピクセル
からなる画像の例

150	167	220	245
127	143	172	230
96	131	155	206
18	42	78	106

対応する行列
(4 × 4 型の非負の整数行列)

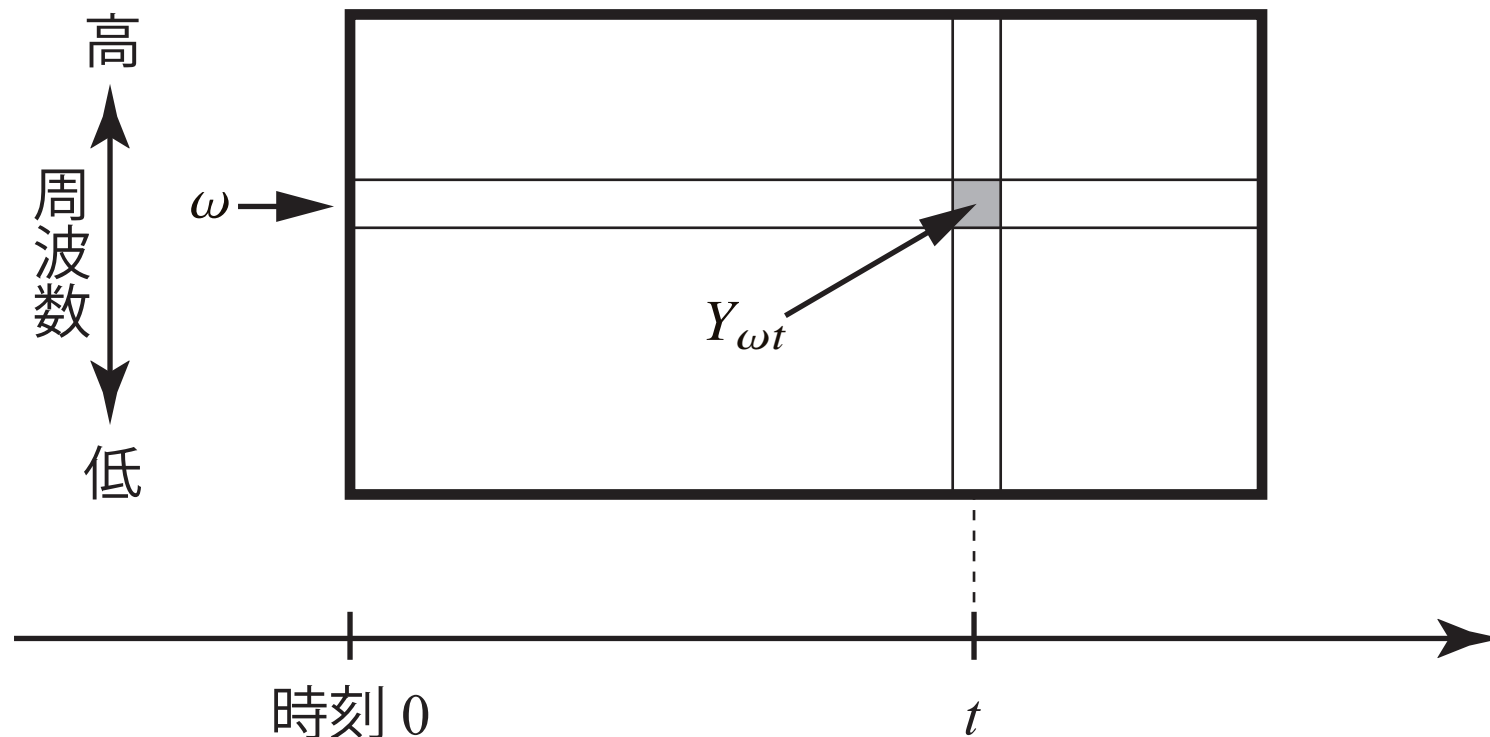
行列はどのように生じるのでしょうか (2/4)

- 文書のデータ (⇔ 2-2 データ表現)
 - 単語文書行列：単語 i が文書 j に現れる回数を A_{ij} とすると、行列 A ができます.
 - こうして、非負の整数行列が生じます.
 - テキストデータの分析や検索に利用されます.



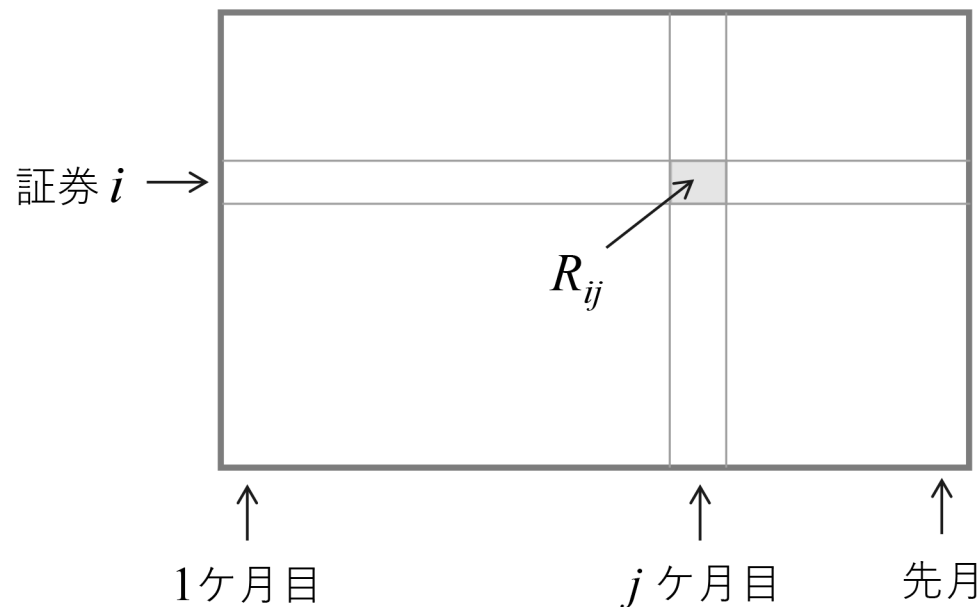
行列はどのように生じるのでしょうか (3/4)

- 音響信号の分析 (⇨ 3-5-4 音響処理・音声認識技術)
 - 時刻 t における周波数 ω の信号成分の強さ $Y_{\omega t}$ を並べると、行列 Y ができます.
 - こうして、非負の実行列が生じます.
 - 各成分は、「強さ」を表すので 0 以上です.



行列はどのように生じるのでしょうか (4/4)

- 証券の収益率の月次データ
 - 証券 i の月 j における収益率を R_{ij} とおけば、行列 R ができます.
 - こうして、実行列が生じます.
 - 損失が生じた場合は $R_{ij} < 0$ なので、一般に正・負どちらの成分もちます.
- ポートフォリオ（運用証券の組合せ）の決定などに用いられます.

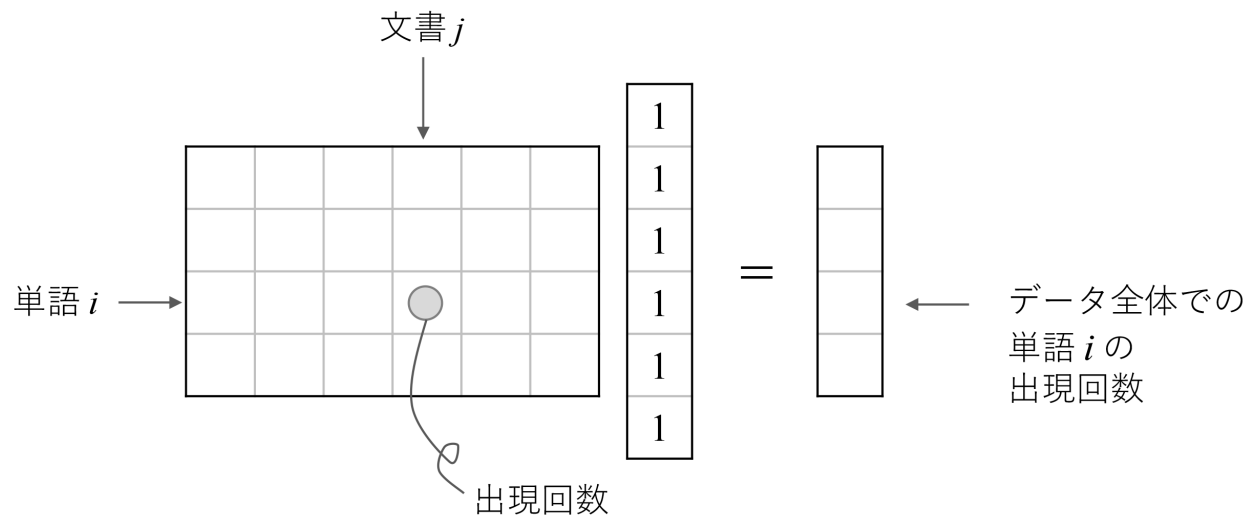


線形代数は どんな役に立つのでしょうか (1/5)

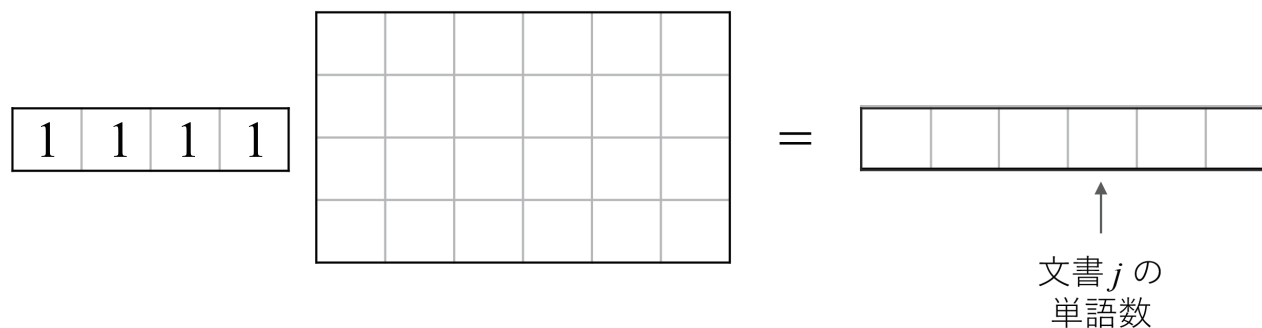
- データ点間の類似度 (⇨ 3-7 言語・知識)
 - データが n 次元ベクトル x_i ($i = 1, \dots, d$) として与えられているとき,
 x_i と x_j の類似度の指標として $\frac{x_i^\top x_j}{\|x_i\| \|x_j\|}$ が用いられることがあります.
- また、線形代数は、線形方程式系を解くために用いられています.
- そのほか、ここでは解説しませんが、データ分析の手法として、次のような場面で用いられています.
 - 主成分分析、画像処理などでの低ランク行列近似（特異値分解）、音響信号処理などでの非負行列因子分解、多次元データの可視化のための多様体学習（固有値問題）など.

線形代数は どんな役に立つのでしょうか (2/5)

- 単語文書行列に対して,
 - 右から $\mathbf{1} = (1, \dots, 1)^\top$ を乗じると,



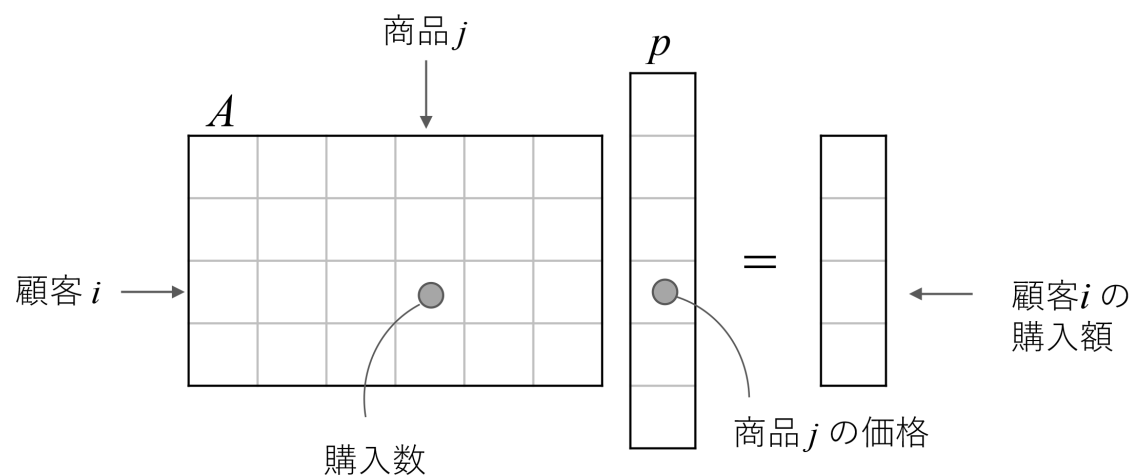
- 左から $\mathbf{1}^\top = (1, \dots, 1)$ を乗じると,



線形代数は どんな役に立つのでしょうか (3/5)

● 購買データ (1/2)

- ある日の POS データから，来店者 i が商品 j を購入した数 A_{ij} を集計して，行列 $A = (A_{ij})$ をつくります.
- 一方，商品 j の価格を p_j とおき，列ベクトル $p = (p_j)$ をつくります.
- Ap を計算すると，



線形代数は どんな役に立つのでしょうか (3/5)

● 購買データ (2/2)

- ある日の POS データから，来店者 i が商品 j を購入した数 A_{ij} を集計して，行列 $A = (A_{ij})$ をつくります．
- 一方，商品 j の価格を p_j とおき，列ベクトル $p = (p_j)$ をつくります．
- $\mathbf{1}^T A$ を計算すると，

$\mathbf{1}^T$

1	1	1	1
---	---	---	---

A

$=$

--	--	--	--	--	--

↑
商品 j の販売数

- $\mathbf{1}^T A p$ を計算すると

$\mathbf{1}^T$

1	1	1	1
---	---	---	---

A

p

p_1
p_2
p_3
p_4
p_5
p_6

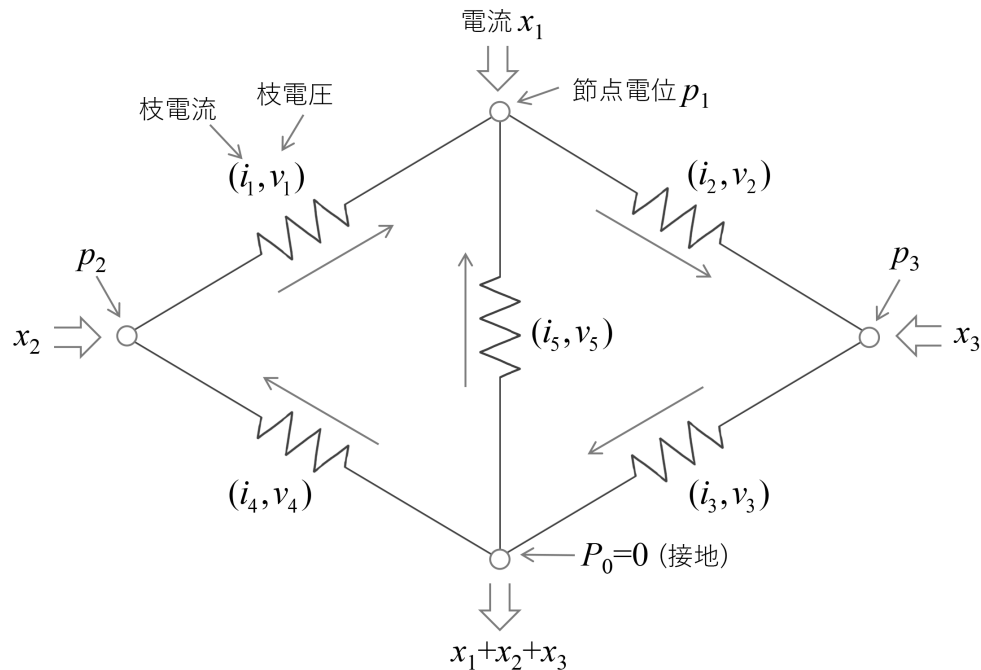
$=$

--

1日の
総売上

線形代数は どんな役に立つのでしょうか (4/5)

● 電気回路 (1/2)



節点 i から節点 l に向かう枝 j があるとき $N_{ij} = 1$, $N_{lj} = -1$ とおくと行列 N ができます :

	枝				
	i_1	i_2	i_3	i_4	i_5
節点 x_1	-1	1	0	0	1
x_2	1	0	0	-1	0
x_3	0	1	1	0	0

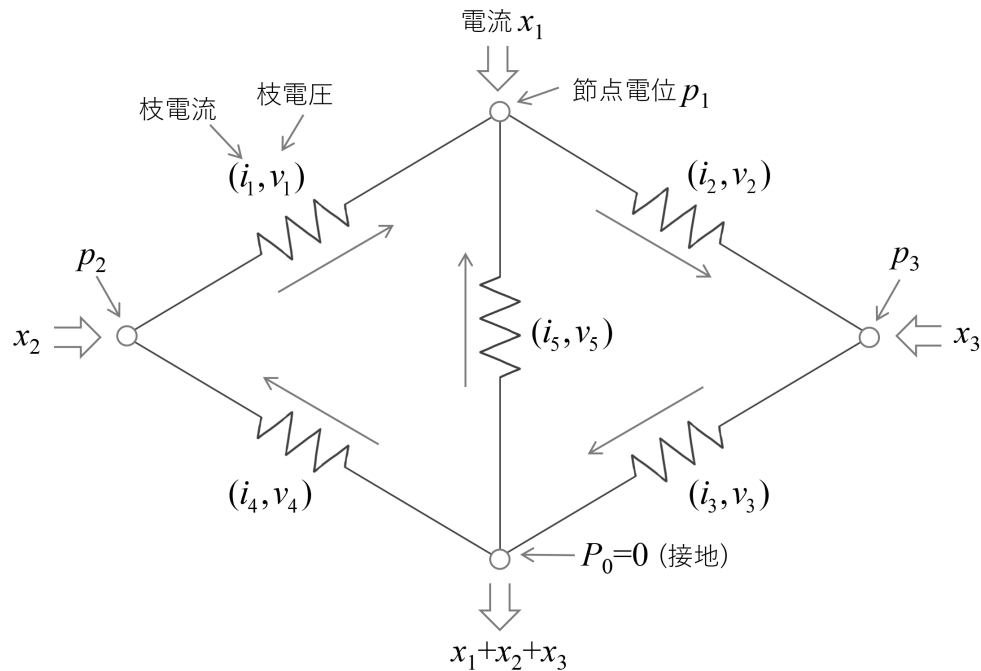
(グラフの接続行列)

● 電流の保存則は,

$$\begin{bmatrix} -1 & 1 & 0 & 0 & -1 \\ 1 & 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & -1 & 1 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} i_1 \\ i_2 \\ i_3 \\ i_4 \\ i_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix}, \quad \text{つまり, } Ni = x.$$

線形代数は どんな役に立つのでしょうか (4/5)

● 電気回路 (2/2)



節点 i から節点 l に向かう枝 j があるとき $N_{ij} = 1$, $N_{lj} = -1$ とおくと行列 N ができます :

		枝						
		i_1	i_2	i_3	i_4	i_5		
節点	x_1	[-1	1	0	0	1]
	x_2		1	0	0	-1	0	
	x_3		0	1	1	0	0	

(グラフの接続行列)

● 節点電位と枝電圧の関係は,

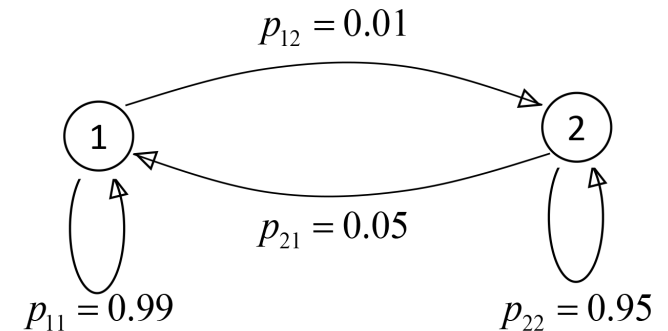
$$\begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \\ v_4 \\ v_5 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -1 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & 0 \\ -1 & 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} p_1 \\ p_2 \\ p_3 \end{bmatrix}, \quad \text{つまり, } \boldsymbol{v} = \boldsymbol{N}^\top \boldsymbol{p}.$$

線形代数は どんな役に立つのでしょうか (5/5)

- マルコフ連鎖 (1/2)

- 具体例として, 毎年, 買い換える商品で, A 社製を買うか B 社製を買うかという問題を考えましょう.

- ① は A 社製を買うという状態,
② は B 社製を買うという状態として,
次の年にどちらに推移するかの確率を
右図のように表します.

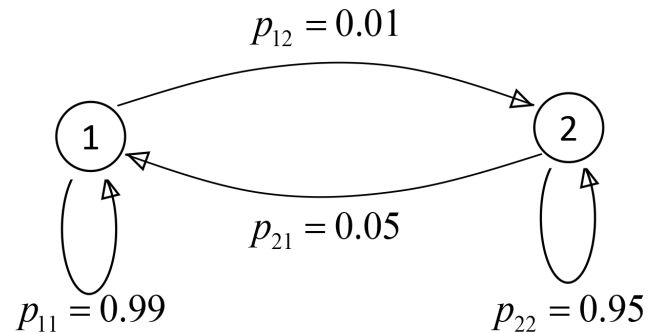


- たとえば, 今年 A 社製を買った人は, 来年は 0.99 の確率で A 社製を買い, 0.01 の確率で B 社製を買う, ということです.
- 確率 p_{ij} を並べると, 行列 $P = \begin{bmatrix} 0.99 & 0.01 \\ 0.05 & 0.95 \end{bmatrix}$ が生じます.
- 成分はすべて 0 以上.
- 行ごとの成分の和は 1.

線形代数は どんな役に立つのでしょうか (5/5)

- マルコフ連鎖 (2/2)

- 時刻 k において, 状態 i である確率を $y_i^{(k)}$ で表します. つまり, A 社製と B 社製のシェアの比が $y_1^{(k)} : y_2^{(k)}$ です ($y_1^{(k)} + y_2^{(k)} = 1$).



- 次の時刻では,

$$y_1^{(k+1)} = p_{11}y_1^{(k)} + p_{21}y_2^{(k)},$$

$$y_2^{(k+1)} = p_{12}y_1^{(k)} + p_{22}y_2^{(k)}.$$

つまり, $\mathbf{y}^{(k)} = \begin{bmatrix} y_1^{(k)} & y_2^{(k)} \end{bmatrix}$ とおけば $\mathbf{y}^{(k+1)} = \mathbf{y}^{(k)} P$.

- いま, $\begin{bmatrix} \frac{5}{6} & \frac{1}{6} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{5}{6} & \frac{1}{6} \end{bmatrix} \underbrace{\begin{bmatrix} 0.99 & 0.01 \\ 0.05 & 0.95 \end{bmatrix}}_{=P}$ が成り立つので, この例ではシェ

アが 5 : 1 が定常状態 (もうそれ以上変化しない状態) です.

- このような定常状態の存在や一意性が, 実は, 行列 P の性質から明らかにできます.